

『エミール』におけるルソーの＜amour-propre＞（利己愛）論 — ＜amour-propre＞の両義性をめぐって —

榊ひとみ

Rousseau's <amour-propre> theory on “Émile ou de l'éducation” : Focusing on the Ambiguity of <amour-propre>

Hitomi SAKAKI

1. 問題の所在

ルソーは、1762年に『社会契約論』と『エミール』の2つの著書を世に送り出した。前者は自由な社会はどのように作られうるのかを、後者は自由な個人はどのように作られうるのかを論じている。すなわち、自由な社会を作るための人間はいかにして作られるのかが『エミール』の論点であり、自由な個人を生み出す社会をどう創造していくかが『社会契約論』の論点となっている。『社会契約論』と『エミール』の関係は、自由な個人が自由な社会を生み出し、自由な社会が自由な個人を生み出すというルソーの構想において、相互補完的な循環関係であるといえよう。

本論では、エミールという架空の子どもが、ひとりの家庭教師の教育により、人間として成長・発達していく教育小説『エミール』において、ルソーが人間の欲望をどのようなものとしてとらえ、教育によって何が可能となるのかについての検討を試みる。このような試みを行うのは、21世紀に生きる我々にとって、「欲望を満たすことが真の幸福なのか」を再度問う必要があると考えるためである。

現代社会においては、「他者への不寛容」、「意地悪化」が問題とされ、ストレスのはけ口としての他者への攻撃、バッシングなどは特に大きな社会問題となっている。これらの問題に対する処方箋として、18世紀半ばに著された『エミール』におけるルソーの欲望論から、我々が学ぶ点は多いといえよう。

2. 課題と方法

(1) 先行研究整理

ルソーの欲望論に関する近年の研究については、思想史の分野では永見（2012）、淵田（2012）

の研究が、教育学の分野では、高橋（2008）、坂倉（1997、2010）の研究が挙げられる。まず思想史の分野における議論を確認し、次に教育学における議論を確認する。

永見（2012:435）は、「自己充足」をキーワードにルソーの研究を議論し、淵田（2012:243）は、ルソー自身の生活様式の意識的な変化を「他者の服従から自己の服従へと自らの生を方向転換させるため」の「自己革命」とよび、ルソーの哲学を「自己服従の哲学」としている。

高橋（2008:143）は、「経済効率主義の価値観に席卷された現在の学校や教育関係において、人間の根源にある『欲望』と『孤独』という克服し難い重要なテーマに今、道徳教育、倫理教育が実践段階でどのように迫りうるか」としている。

坂倉（2010:143）は、『エミール』という書物がわれわれにつきつけているのは、教育がなぜ必要となるのか、なぜ教育という営みが困難になるのか、という問題なのである。このような観点から読み直してみるならば、私たちがふだんは疑おうとすらしなが、しかし、私たちの思考や行動に絶大な影響力を及ぼしている社会通念を吟味するための有効な手がかりを、『エミール』は与えてくれるにちがいない」としている。

特に高橋（2008）と坂倉（1997、2010）の議論では、「自愛（アムール・ド・ソワ＝amour de soi）」（高橋2008:139）と「自尊心[利己心]（アムール・プロプル＝amour propre）」（高橋2008:139）の理解をめぐって、それぞれ独自の議論が展開している。その内容を確認しておく。高橋（2008:139）は、『エミール』のあとにルソーが著した未完の小説『エミールとソフィ』において、エミールがソフィとの結婚生活を終わらせることを選択したことについて、以下のよう

に述べている。

「このように一見、思いやりに見える情念の迷妄を理性が破る力こそ、エミールが『教育の力』と表現したものであり、ルソー自身は正しい理性の働かせ方は思春期の到来を待つて教育されるべきと考えていた。そしてこの時期に育くむべき大切なこととは、社会のなかで理性的に思考し道徳的に判断する時に、その行為を根底で支えるもの、すなわちルソーが『エミール』第4編で強調した『自愛 (アムール・ド・ソワ = amour de soi)』と『自尊心 [利己心] (アムール・プロプル = amour propre)』という二つの愛の概念である。ルソーの言う二つの愛のうち、『自愛』は自然的な感情であり、人間においては理性によって導かれ憐れみによって変容されて、人間愛と美德を生み出すものであるとされる。いっぽう『自尊心 [利己心]』は、社会のなかで生れる相対的で人為的な感情にすぎず、それは各個人に自己を他のだれよりも重んじるようにしむけ、人々に互に行なうあらゆる悪を思いつかせるとともに、おのれの名誉の源泉となる利己的な愛とされている。ルソーはこの自尊心 [利己心] を理性化し、自愛の延長としての隣人愛や人間愛に矛盾しないものにすることを、教育の大きな使命としていた。」

高橋 (2008) の議論においては、< amour de soi > と < amour-propre > を対置させ、< amour-propre > を理性化させていくことが、ルソーの考える教育の使命という見解を示している。

一方、坂倉 (1997: 42) は、『『自己への愛』を意味する『自己愛 (amour de soi)』と『利己愛 (amour-propre)』を区別することにルソーの人間観の特色が認められる」としつつも、「このような区別は、両者を同義語とするフランス語の一般的な用語法からみれば、例外的である」とする。坂倉 (1997: 42) は、「自己愛 (amour de soi)」と「利己愛 (amour-propre)」を包括する概念として「利己的情念」という語を用いている。坂倉によれば、「利己的情念」とは、「“自己を対象とする愛”として、自己保存と幸福 (安寧) を求める情念、およびその様々な変容形態である」という。その変容形態として「自己の資質ないし

持ち物によって自己を高く (時に過大に) 評価する『傲慢・自尊 (orgueil)』、『高慢・誇り (fierté)』、『思い上がり (présomption)』、『虚栄心 (vanité)』、他人の自己に対する優位への嫌悪 (嫉妬心) などがその具体例としてあげられる」と説明している。

坂倉 (1997: 42) によれば、「従来のルソー研究は、『自己愛』=善、『利己愛』=悪、という図式的な理解に基づいて、『自己愛』をルソーの教育理論全体の規制原理とみなす一方、『利己愛』を専ら『あらゆる邪悪の原理』とみなしてきた。そのため、『利己愛』の概念については、これまで本格的な研究の対象となったことはないようである。しかし、『利己愛』は悪=病をもたらすものであるとともに、悪=病を克服するための『治療薬』としても重要な役割を担っており、後者の文脈では通説に反して肯定的な含意をもつ」としたうえで、「善良な『自己愛』と邪悪な『利己愛』を対置し、前者を選びとることがルソーの主張なのではない」と、「自己愛 (amour de soi)」と「利己愛 (amour-propre)」の二つの概念の再解釈を試みている。

坂倉 (1997: 42) によるその再解釈とは以下のようなものである。

「ルソーにおいて、『自己愛』は『利己愛』の特殊形として意図的に導入されたものであり、他人との精神的=道徳的関係を剥奪された個人が持つ自己保存と幸福の欲求を意味する。所与の悪が物事との物的関係によって充足される自己保存から生じるのではなく、自己と他人を比較し、『他に抜きん出よう』とする自己優先から生じるとするルソーにあって、『自己愛』はキリスト教の原罪説を退けて人間本性を擁護するための武器として、『利己愛』は善悪を相対的に捉える啓蒙主義を批判して所与の悪を断罪するため武器として機能している。」

坂倉 (1997: 42) は、「利己的情念の質的転換を通じて人間のあり方を転換させようとする構想に、ルソーの教育思想の独自性が典型的な形で現れている」としている。坂倉が「自己愛」と「利己愛」の両者を含む「利己的情念」という概念を導入することの意義は、ルソーのいう「自己愛 (amour de soi)」と「利己愛 (amour-propre)」を二項対立的に捉えることの限界を明らかにし、

「利己的情念」の質的転換をめざすことに、ルソーの教育思想の特徴を見いだしている点にあるといえる。

坂倉の2010年論文では「自己愛（amour de soi）」と「利己愛（amour-propre）」の概念について、前者を「他人の存在を想定していない『自己愛』」として、後者を「他人との関係における（他人と比較された）自己を対象とする愛」として峻別している。坂倉の議論からは、二つの概念を隔てるものは、「他者の存在」の認識の有無にあるといえる。

坂倉（2010:139）は、「利己愛（amour-propre）」における「能動的」な現れ方と、そうではない現れ方の二つの場合について議論している。まず、後者について確認しておこう。

「『利己愛』は、他人との関係における（他人と比較された）自分を対象とする愛で、他人よりも幸福であることを望む。他の人々も、自分を誰よりも愛し、尊重してくれることを願う。そのため『利己愛』は、他人の眼に自分を現実以上に見せようとする虚栄心や、他人を軽蔑し、過大な自己評価を求める傲慢を生み出し、他人の不幸を喜ぶ排他的な情念へと堕落する危険性をはらんでいる。こうした危険性は、他の人々と利害に基づいて関係を取りむすぶ場合に現れる。」

しかし、条件によっては、「利己愛」は、「全く異なった」現れ方もするという。次にこれについて確認しよう。

「他方で、苦しんでいる他人の立場に身を置いて他人を慈しむ場合には、また、自分の業績や実力を適切に評価する場合には、『利己愛』はまったく異なった現れ方をする。『秩序への愛』、『真、善、美への愛』が『利己愛』やそれを生み出した想像力とともに能動的になると、『良心』と呼ばれる。美しいものを愛することによって洗練された『良心』は、自分の功績に基づいて『真の名誉』を自分に与えることにより、『利己愛』に精神的な満足（至福）を与える。この場合、『利己愛』は人間を徳へと導く誇りを生む。」

ここまで、高橋（2008）と坂倉（1997,2010）の研究における＜amour de soi＞と＜amour-

propre＞の概念の違いをみてきたが、高橋（2008）の議論を踏まえた研究上の課題としては、＜amour-propre＞の理性化の展開論理が明らかにすべき課題として浮かび上がる。この課題に対しては、坂倉（2010）の研究が示唆を与えている。坂倉（2010）は、＜amour-propre＞が「能動的に」（ポジティブに）現われる条件として、「苦しんでいる他人の立場に身を置いて他人を慈しむ場合」や「自分の業績や実力を適切に評価する場合」を提示しているといえる。

（2）課題と方法

本論では、坂倉（2010）の研究を、ルソーの＜amour-propre＞論における到達点と位置づける。そのうえで、自己が周りの他者とのような関係を取り結んだときに、＜amour-propre＞の現われ方が、ポジティブに転じるのかについて明らかにされなければならない。そこで、本論においては、＜amour-propre＞がポジティブに現われる条件を、自己－他者関係の質との関連で明らかにすることを課題とする。

この課題を明らかにするために、関係する論文、関係する図書、およびルソーが著した『エミール』、『人間不平等起源論』、『社会契約論』の原著（仏語）、および日本語訳本を検討する。原著は『Émile ou de l'éducation』（Éditions Garnier Frères,1964）のほか、『Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES V, Éditions Slatkine,2012』、『Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES VII, Éditions Slatkine,2012』、『Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES VIII, Éditions Slatkine,2012』（ジュネーブのSlatkine社から発行されたルソー全集の第五巻、第七巻、第八巻）を使用する。日本語訳本については、岩波文庫から出版されている今野一雄訳の『エミール（上）』、『エミール（中）』、『エミール（下）』を主に使用するが、訳語の違いを確かめるために、白水社から出版されている樋口謹一訳の『ルソー選集8 エミール（上）』、『ルソー選集9 エミール（中）』、『ルソー選集10 エミール（下）』および1978年から1982年に出版された白水社の『ルソー全集』の第四巻、第六巻、第七巻を用いる。

なお、本論で『エミール』の本文を提示する際には、今野一雄訳を引用するが、本論の第4章でとりあげる＜amour de soi＞と＜amour-

propre >の日本語の訳語としては、< amour de soi >に関しては、今野が翻訳した「自己愛」の語を用いる。< amour-propre >の訳語に関しては、今野（1962）及び樋口（1980, 1986）は、「自尊心」と翻訳し、坂倉（1997, 2010）は、「利己愛」と翻訳しているが、< amour-propre >に両義的な意味を持たせるため、本論では、< amour-propre >については、坂倉（1997, 2010）が提示している「利己愛」の語を用いることとする。

3. 『エミール』におけるルソーの幸福観

本論では、< amour-propre >（利己愛）を両義的なものとして捉える坂倉の1997年論文、2010年論文を研究の立脚点とし、いかなる自己—他者関係において、< amour-propre >（利己愛）のポジティブな発現は可能となるのかを研究の課題としているが、この議論の前提として、『エミール』におけるルソーの幸福観について確認しておきたい。この作業を行うことの意味は、ルソーが、人間の幸福を個人の「能力」と「欲望」との均衡状態として説明していることによる。

『エミール』の第二編において、ルソーは、人間の幸福について次のように述べている。なお、フランス語については、筆者が原著を参照し、挿入している。

「人類は万物の秩序のうちにその地位をしめている。（中略）人間を人間として考え、子どもを子どもとして考えなければならぬ。それぞれの者にその地位をあたえ、かれらをそこに密着させて考え、人間の情念（passions）を人間の構造にしたがって秩序づけること、これが人間の幸福のためにわたしたちにできることのすべてだ。」（今野訳（上）：133, 下線は引用者による）

「苦しみの感情にはいつもそれからのがれたいという欲望がともなう。喜びの観念にはかならずそれを楽しみたいという欲望がともなう。いっさいの欲望（désir）は欠乏（privation）を前提とする。そして、欠乏の感情にはかならず苦しみがともなう。だから、わたしたちの欲望と能力とのあいだの不均衡のうちにこそ、私たちの不幸がある。その能力が欲望とひとしい状態にある者は完全に幸福といえるだろう。」（今野訳（上）：134, 下線は引用者による）

「それはただ、能力をこえた余分の欲望（désir）をなくし、力と意志とを完全にひとしい状態におくことにある。そうすることによってはじめて、いっさいの力は活動状態にあり、しかも心は平静にたもたれ、人は調和のとれた状態に自分をみいだすことができる。」（今野訳（上）：135, 下線は引用者による）

ルソーによれば、人間の幸福とは、「能力」と「欲望」が均衡を保っている状態であるという。人間を不幸にするのは、持っている「能力」以上の「欲望」を持つことにあるとしている。

「自然の状態の近くにとどまっていればいほど、人間の能力と欲望の差はちぢまり、したがって幸福から離れることが少なくなる。あらゆるものを欠いているように見えるときに人間はいちばんみじめなのではない。不幸はものをもたないこと（privation）にあるのではなく、それを感じさせる欲望のうちにあるのだ。」（今野訳（上）：136, 下線は引用者による）

ルソーは、「不幸なこと」とは、「ものをもたないこと（privation）にあるのではなく」「それを感じる欲望のうちにある」とし、欠乏や剥奪を感じる状態のなかに不幸があるとしている。

『エミール』第二編の「幸福論」の箇所では、ルソーは、欲望（desirs）と能力（les facultés）の関連で幸福について述べているが、欲望の質の区分については言及していない。そこで、次章においては、『エミール』におけるルソーの欲望観を概観し、ルソーが欲望の質の違いについてどのように言及しているかについて検討を行う。

4. ルソーの欲望観

『エミール』の第二編における「幸福論」に続き、ルソーは、人間の欲望について次のように述べている。

「社会は人間をいっそう無力なものにした。社会は自分の力にたいする人間の権利を奪いさるばかりではなく、なによりも、人間にとってその力を不十分なものにするからだ。だからこそ、人間の欲望（desirs）はその弱さとともに増大するので

あって、大人にくらべたばあいの子どもの弱さもそれにもとづいている。大人が強い存在であり、子どもが弱い存在であるのは、前者が後者よりも絶対的な力をいっそう多くもっているからではなく、前者はもともと自分で自分の用をたすことができるのに、後者はそれができないからだ。だから大人にはいっそう多くの意志があり、子どもはいっそう多くの気まぐれをおこすことになる。気まぐれということばを、わたしは、ほんとうに必要でないすべての欲望 (tous les désirs qui ne sont pas de vrais besoins)、他人の助けをまたなければ満足させることのできない欲望を意味するものと解する。

（今野訳（上）：145-146, 下線は引用者による）

「ほんとうに必要とするもの (le vrai besoin)、自然の必要 (le besoin naturel) と、あらわれはじめた気まぐれによる欲望 (besoin de fantaisie)、あるいはすでに語ったような生命の過剰から生じるにすぎない欲望とを注意ぶかく見わけることが必要だ。」

（今野訳（上）：150, 下線は引用者による）

ここでルソーは、人間の欲望を、社会との関係で説明している。「社会は人間をいっそう無力なものした」とルソーが考えるのは、「人間にとってその力を不十分なものとするからだ」という。それは、「自分で自分の用をたすことができる」状態から、「他人の助けを待たなければ満足させることができない」状態へと、社会的な力の増大によって、相対的に人間の力が奪われていることを意味していると考えられる。

ルソーにとっての「強さ」「弱さ」とは、「自分でできる力」と「他者の助けによって可能となる力」の配分により、措定されると考えられる。というのも、「いっさい欲望は欠乏は前提とする」¹ためである。そのため、ルソーは、「人間の欲望 (dedir) は、その弱さとともに増大する」と説明しているのだと考えられる。

さらに、ルソーは、「ほんとうに必要とするもの (le vrai besoin)、自然の必要 (le besoin naturel) と、あらわれはじめた気まぐれによる

欲望 (besoin de fantaisie) とを峻別する。

今野一雄は、「fantaisie」の語を「きまぐれ」と訳しているが、坂倉（2010：119）は、この「fantaisie」の語を「妄想」としている。坂倉（2010：119）による解説を確認しておこう。

「文明化された社会の中で生きる人々は、単に空腹を満たすばかりではなく、珍しいものを食べたいとか、他人よりも豪華なものを食べたいといった欲望を持つ。自然の秩序に属している生理的・身体的欲求をこえて、特定の集団の中でのみ意味を持つ欲望を、ルソーは「妄想」(fantaisies)と呼ぶ。「妄想」は想像力によってとめどなく大きくなっていくので、それを満足させることはほとんど不可能である。」

坂倉がいう「生理的・身体的欲求」が、「ほんとうに必要とするもの (le vrai besoin)、自然の必要 (le besoin naturel)」であり、「気まぐれ (妄想) による欲望」とは、「ほんとうに必要でないすべての要望 (tous les désirs qui ne sont pas de vrais besoins)」であり、「他人の助けをまたなければ満足させることのできない欲望」である。

『エミール』においてルソーは、「besoin」（欲求／必要）という語と、「dédire」（欲望）という語を厳密に使い分けて議論してはいないが、ルソーの欲望観を理解する際に、『人間不平等起源論』が示唆するものは多いだろう。

『人間不平等起源論』においても、ルソーは、「besoin」（欲求／必要）と、「dédire」（欲望）の語を使い分けて議論していないが²、文明化される以前の社会を生きる未開人と、文明化されたあとの社会に生きる人々との欲望の質の違いについて議論を展開している。ルソーは、『人間不平等起源論』において、文明化された18世紀社会の批判を意図して、未開人の生活を以下のように描いている。

「彼（＝未開人、引用者）の欲望はその身体的

2 「besoin」（欲求／必要）と、「dédire」（欲望）を厳密に使い分けるとすれば、ルソーが「besoin de fantaisie」としている部分は、本来は「dédire de fantaisie」としていると考えられる。（今野一雄訳『エミール（上）』岩波書店、p 150）

1 今野一雄訳『エミール（上）』岩波書店、p 134

な欲求以上になることはない。彼がこの世界で知っている欲望は、食物と異性と休息だけである³。」

「そして欲求が満たされてしまうと、すべての欲望は消えるのである⁴。」

(et le besoin satisfait, tout le désir est éteint)⁵

未開人の欲望 (désirs) は、「身体的な欲求」 (besoins physiques) 以上にはならず、有限なものであることをルソーは示唆している。そして、未開人の欲求は、満たされ (satisfait) うるものであり、未開人の欲望は、満たされ消える。

しかし、冶金と農業により、社会は文明化され、社会が変貌を遂げることによって、人々の欲望の質も変化する。そのことをルソーは以下のように描く。

「それゆえいまや、われわれのすべての能力は発展し、記憶力と想像力は働き、自尊心は利害に巻き込まれ、理性は活発になり、精神は可能なきがりの完成の限界にまでほとんど達しているのである。いまや自然のすべての素質は活動しはじめ、それぞれの人間は、単に財産の分量や、人の役に立つ、または害になる能力についてのみならず、精神や美しさや体力または器用さについて、さらに長所または才能についても、その段階と運命とが定められているのである。しかもそれらの素質は人々の尊敬をひきつける唯一のものであるから、やがてそれらをもっているか、またはもっているようなふりをする必要があるとなった。すなわち自分の利益のためには、実際の状態とは違った自己を示す必要があったのである。存在と外観とはまったく異なった二つのものとなった。そしてこの区別から、いかめしい豪奢と、人をだますような策略と、そしてそれにともなうあらゆる悪

徳とが出てきたのである。また、他方では、以前は自由で独立であった人間が、いまや無数の新しい欲求のために、いわば自然全体に、とりわけその同胞たちに服従して、彼はその同胞の主人となりながらも、ある意味ではその奴隷となっているのである。すなわち彼は、富んでいれば同胞の奉仕が必要であり、貧しければその援助が必要なのである。さらにまた平凡だからといって、同胞なしですまされる状態に置いてもらえるわけではない。それゆえ人間は、たえず同胞たちが自分の運命に関心をもつようにし、そして実際にあるいは表面的に、彼の利益のために働くことが自分たちの利益なのだとわからせるように努めなければならない。だが、そのため彼はある人たちに対しては必ずく悪賢くなり、他の人たちに対しては横柄で冷酷になる⁶。」

長い引用となったが、ここでのポイントは、文明化した社会においては、「無数の新しい欲求」 (une multitude de nouveaux besoins) が生まれ、それによって、人間は、自分たちの同胞の「奴隷」 (l'esclave) となってしまっていることを、ルソーが指摘している点にある。すなわち、文明化された社会において生まれた「無数の新しい欲求」 (une multitude de nouveaux besoins) とは、「ほんとうに必要とするもの (le vrai besoin)、自然の必要 (le besoin naturel)」、「身体的な欲求」 (besoins physiques) とはその発生の源が異なる欲求であるなのである。

「ほんとうに必要とするもの (le vrai besoin)」、「自然の必要 (le besoin naturel)」、「身体的な欲求 (besoins physiques)」が、人間の生物として生命を維持するための欲求であるのに対し、「無数の新しい欲求」 (une multitude de nouveaux besoins) とは、文明化されたあとの人々が、人間社会の自己－他者関係を構築するために生じた欲望である。「新しい欲望」 (nouveaux besoins) が、なぜ「無数」となるのか。小林善彦／井上幸治の訳では「une multitude de nouveaux besoins」は「無数の新しい欲求」とされているが、「multitude」とは「群衆」をも意味することから、人間社会の自己－他者関係にお

3 小林善彦・井上幸治訳『ルソー 人間不平等起原論／社会契約論』中央公論新社,p52。なお、小林・井上訳の訳本では『人間不平等起原論』とされており、「起源」という表記にはなっていない。白水社の『ルソー選集』6 (原好男訳) では『人間不平等起源論』と表記されている。

4 同上,p76

5 Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES V, Éditions Slatkine, 2012, p134

6 小林善彦・井上幸治訳『ルソー 人間不平等起原論／社会契約論』中央公論新社,p104-105

ける欲求を刺激し、それを満たそうとするような「群衆の欲求」が自己に付着すると考えられる。本来、自分のものではない「群衆の欲求」が自己に侵入し、自己は同胞たちの「奴隷」となってしまうのだと考えられる。

ルソーは、「besoin」（欲求／必要）という語と、「désir」（欲望）という語を使い分けていないが、本論では、便宜上、「人間が生物として生命を維持するための欲求」を「欲求」（besoin）として、「文明化されたあとの人々が、人間社会の自己－他者関係を構築するために生じた欲望」を「欲望」（désir）として、議論を進めたい。

5. 『エミール』における「自己愛」（amour de soi）と「利己愛」（amour-propre）

『エミール』の第四編において、ルソーは、生命を維持しようとする自己保存のための欲求にもとづく「自己愛（amour de soi）」と、他者からどのような存在として扱われたいのかという、社会的存在である人間としての欲望から生じる「利己愛（amour-propre）」を区別し、以下のように述べている。

「自分自身にたいする愛（l'amour de soi）は、いつでもよいもので、いつでも正しい秩序にかなっている。人はだれでも、とくに自己を保存しなければならないのだから、なによりも心がけなければならないこと、いちばんだいじなことは、当然、この自己保存ということにたえず心をくばることだ。」

（今野訳（中）：10、下線は引用者による）

「だからわたしたちは、自己を保存するために、自分を愛さなければならない。どんなものよりもいっそう自分を愛さなければならない。」

（今野訳（中）：10、下線は引用者による）

「子どもの最初の感情は、自分自身を愛することだ。」

（今野訳（中）：11、下線は引用者による）

「けれども、子どもがその関係、必要、能動的または受動的な依存関係を拡大していくにつれて、他人との結びつきという感情がめざめ、義務

とか好き嫌いとかの感情が生まれてくる。そこで子どもは、命令的になり、嫉妬を感じるようになり、人をだましたり、仕返しをしたりするようになる。」

（今野訳（中）：12、下線は引用者による）

「自分にたいする愛（l'amour de soi）は、自分のことだけを問題にするから、自分の本当の必要（vrais besoins）が満たされれば満足する。けれども、自尊心（l'amour-propre）は、自分をほかのものにくらべてみるから、満足することはけっしてないし、満足するはずもない。」

（今野訳（中）：12-13、下線は引用者による）

「こうして、なごやかな、愛情にみちた情念は自分に対する愛（l'amour de soi）から生まれ、憎しみにみちた、いらだちやすい情念は自尊心（l'amour-propre）から生まれるのだ。」

（今野訳（中）：13、下線は引用者による）

「だから、人間を本質的に善良にするのは、多くの欲望をもたないこと、そして自分をあまり他人にくらべてみないことだ。人間を本質的に邪悪にするのは、多くの欲望をもつこと、そしてやたらに人々の意見を気にすることだ。」

（今野訳（中）：13、下線は引用者による）

この箇所、ルソーは、＜amour de soi＞と＜amour-propre＞の違いを「自分の本当の必要（vrais besoins）」と、「他人との結びつき」によって新たに生じた欲望とに峻別している。後者は、前章で述べた「文明化されたあとの人々が、人間社会の自己－他者関係を構築するために生じた欲望」だといえる。

ここまでの検討により、ルソーは「自己愛（amour de soi）」と「利己愛（amour-propre）」の概念を峻別することにより、人間の欲を二つの質の異なる階層にわけて議論をしていることがわかる。すなわち、前者は自己保存のための必要・欲求（besoin）であり、後者は、他者との関係において自己の優位性を保とうとする欲望（désir）である⁷。前者は生理的な欲求であるため、限り

7 岩田正美（2000）は現代社会における消費を必要（needs）と欲望（wants）に区別し議論

のある欲であるが、後者は、他者からどうみられたいのか、どのように扱われたいのかに対する欲望であるため、限りのない欲である。「他人より見栄えよく」「他人よりもすこしでも素晴らしく」という、他者の視点から自分に欲望を付与するものであるため、際限がない。すなわち、＜amour de soi＞（自己愛）と＜amour-propre＞（利己愛）の違いは、「満たしうる」必要・欲求と、「満たしえない」欲望の違いにあるといえる。

6. 「自己－他者関係を構築するための欲望」と＜amour-propre＞の両義性

本論の課題は、＜amour-propre＞（利己愛）を両義的なものとして捉える坂倉（1997,2010）の研究を立脚点とし、いかなる自己－他者関係において、＜amour-propre＞（利己愛）のポジティブな発現は可能となるのか明らかにすることであるが、ここまでの検討により、以下の二点に整理することができる。

第一に、「ルソーにおいて、『自己愛』は『利己愛』の特殊形として意図的に導入されたものであり、他人との精神的＝道徳的関係を剥奪された個人が持つ自己保存と幸福の欲求を意味する」という、坂倉（1997）の説を援用するならば、現代社会に生きる我々にとって、＜amour de soi＞（自己愛）なるものの想定は、現実的に不可能な設定である。すなわち、他者との依存関係を排除した＜amour de soi＞（自己愛）の設定は、生きていくための財やサービスのほとんどを、他者の労働と他者の労働の成果物である商品を購入することによって賄っている現代社会の生活様式においては、現実味をもたないためである。

第二に、むしろ、「文明化されたあとの人々が、人間社会の自己－他者関係を構築するために生じた欲望」から生じる＜amour-propre＞（利己愛）の矛盾をどう乗り越えるかにこそ、ルソーの教育思想の現代的意義があると考えられる。

18世紀に生きたルソーは、『人間不平等起源論』において、当該社会の矛盾を分析し、その矛盾を乗り越える新しい社会のあり方を模索した。当該社会の社会規範や価値観に反映された「人間社会の自己－他者関係を構築するために生じた欲望」

とは、当該社会の矛盾を反映する欲望である。「他者より優位に立ちたい」という欲望は、ルソーのいうところの他者の「奴隷」となる欲望である。

では、どのようにすれば、この「矛盾する欲望」を乗り越えることができるのか。この点について、宮崎（2004）の議論が我々に示唆を与える。

宮崎（2004：9-12）は、R.D. レインの『引き裂かれた自己』を援用し、現代社会に生きる我々は、「仮面をつけた自己」と「本当の自分」とのあいだで「引き裂かれた」状態にあるという。この矛盾・葛藤を乗り越えるには、矛盾している自己を意識的に語ることが必要であり、そのことによって、信頼関係が構築されるという。しかし、矛盾している自己を語るには、「矛盾の中にある他者の痛みや苦しさを引き受ける」他者の存在、「共感的」な他者の存在が必須となる。宮崎（2004：12）は「自己の矛盾を受けとめ解決する営みとしての学びは、仲間との関係の中で進む。したがって、そこで要請される力も、引き裂かれた自己を維持できる能力（矛盾を受けとめる能力）であり、自己を新たに統一する能力であるが、それは同時に個人のみならず仲間として矛盾を受け止め、仲間とともに解決する能力として現実的である。それゆえ、この力は連帯する能力と言ってもよい」としている。

すなわち、「矛盾する欲望」を乗り越えるためには、「欲望」そのものを対象化し、「本音を聞いてくれる他者の存在」が必要不可欠であり、他者に語ることによって、「個別的自己と普遍的自己の二重化⁸」が可能となる。そして更に、二重化された自己を仲間とともに統一していくプロセスこそが、宮崎のいう「学び」であり、人間の学習であるといえる。

7. 結論と残された課題

本論の課題に対する結論は、以下のように整理される。

「矛盾する欲望」そのものを対象化し、「本音を語る」ことが可能となる自己－他者関係において、自己が「本音を語る」ことにより、他者もまた、「矛盾する欲望」に苦しむ存在であることが相互に発

8 宮崎隆志（2004）「協同における出会いと学び」北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室『社会教育研究』第22号,p9

見されるとき、仲間としての関係に発展する。当該社会の社会規範そのものに矛盾・分裂があることが仲間とともに発見されるとき、その仲間は、社会の新しい規範を模索し、創造していく「共同探求者⁹」となる。こうした自己－他者関係が取り結ばれたとき、＜amour-propre＞の現われ方は、ポジティブに転換していくと考えられる。

本論では、坂倉（2010）の研究を、ルソーの＜amour-propre＞論における到達点と位置づけ、自己が周りの他者とどのような関係を取り結んだときに、＜amour-propre＞の現われ方は、ポジティブに転じるのかについて明らかにすることを課題としたが、＜amour-propre＞論の源流を視野にいて議論することはできなかった。

モンテスキューが『ペルシア人の手紙』のなかで論じている＜amour-propre＞論との関連で、ルソーの＜amour-propre＞論を把握・理解することが、今後の課題である。

＜文献＞

- Jean-Jacques Rousseau, *Émile ou de l'éducation*, Éditions Garnier Frères, 1964
- Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES V, Éditions Slatkine, 2012
- Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES VII, Éditions Slatkine, 2012
- Jean-Jacques Rousseau ŒUVRES COMPLÈTES VIII, Éditions Slatkine, 2012
- Montesquieu, *Lettres Persanes*, Genève Librairie Groz, 1965
- ルソー著・今野一雄訳（1962）『エミール（上）』岩波書店
- ルソー著・今野一雄訳（1963）『エミール（中）』岩波書店
- ルソー著・今野一雄訳（1964）『エミール（下）』岩波書店
- 山路昭・浜名優美・原好男・宮治弘之訳（1978）『ルソー全集 第4巻』白水社
- 樋口謹一訳（1980）『ルソー全集 第6巻』白水社
- 樋口謹一・松田清・西川長夫訳（1982）『ルソー全集 第7巻』白水社
- ルソー著・樋口謹一訳（1986）『ルソー選集 8 エミール（上）』白水社
- ルソー著・樋口謹一訳（1986）『ルソー選集 9 エミール（中）』白水社
- ルソー著・樋口謹一訳（1986）『ルソー選集 10 エミール（下）』白水社
- モンテスキュー, C.L. (1950) 大岩誠訳『ペルシア人の手紙（上）』岩波書店
- モンテスキュー, C.L. (1951) 大岩誠訳『ペルシア人の手紙（下）』岩波書店
- 西嶋幸右（1996）『文明批評家モンテスキュー―「ペルシア人の手紙」を読む―』九州大学出版会
- デッラ・ヴォルペ, G (1964 = 1968) 竹内良知訳『ルソーとマルクス』合同出版
- 本田由紀（2014）『社会を結びなおす―教育・仕事・家族の連携へ』岩波ブックレット 899, 岩波書店
- デュルケーム, E. (1975) 小関藤一郎／川喜多喬訳『モンテスキューとルソー』法政大学出版局
- ボードリヤール, J (2015) 今村仁司・塚原史訳『消費社会の神話と構造 新装版』紀伊國屋書店
- 西研（2016）『NHK 100 分 de 名著 ルソー「エミール」』NHK 出版
- 有井行夫（1987）『マルクスの社会システム理論』有斐閣
- 草光俊雄・眞嶋史叙監修（2014）『欲望と消費の系譜』NTT出版
- 岩田正美（1991）『消費社会の家族と生活問題』培風館
- 高橋美恵子（2008）『『欲望』の統制という教育的課題 ― J.J. ルソーの『エミールとソフィー』（第一の手紙）における道徳的判断―』関東学院大学文学部紀要第113号, pp.129-145
- 永見文雄（2012）『ジャン＝ジャック・ルソー 自己充足の哲学』勁草書房
- 小林善彦・井上幸治訳（2005）『ルソー 人間不平等起原論／社会契約論』中央公論新社
- 杉之原寿一（1968）「ルソーの社会思想―個人主義と集団主義―」桑原武夫編『京都大学人文科学研究所報告 ルソー研究 第二版』岩波書店, pp.95-126
- 坂倉裕治（1997）「ルソーにおける利己的情念と教育の問題」慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 No.46, pp.41-49

9 フレイレ, P. (1979) 『被抑圧者の教育学』亜紀書房, p.144

- 坂倉裕治 (2010)「教育をめぐる問い ―『エミール』を読む―」 桑瀬章二郎編『ルソーを学ぶ人のために』世界思想社, pp.117-143
- 中江桂子 (2017)『不協和音の宇宙へ：モンテスキューの社会学』新曜社
- 櫛ひとみ (2017)「戦後日本の子育て・子育て支援の社会史―高度経済成長期を中心に―」『子ども発達臨床研究』No.10, pp.109-125
- 岩佐茂・島崎隆・高田純編 (1991)『ヘーゲル用語辞典』未来社
- モルネ, D (2003) 高波秋訳『ルソー』
- マルクス, K(1844=1964) 城塚登・田中吉六訳『経済学・哲学草稿』岩波書店
- マルクス, K／エンゲルス, F (1845-1846=2002) 廣松渉編訳・小林昌人補訳『新編輯版 ドイツ・イデオロギー』岩波書店
- ジラール, R (1971) 古田幸男訳『欲望の現象学 ロマンティークの虚偽とロマネスクの真実』法政大学出版局
- 淵田仁 (2012)「何者かになること 自己服従の哲学者ルソー」『現代思想』vol.40-13, pp.240-245
- レイン, R.D. (1971) 坂本健二・志貴春彦・笠原嘉訳『ひき裂かれた自己』みすず書房
- フレイレ, パウロ (1979) 小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳『被抑圧者の教育学』亜紀書房
- 宮崎隆志 (2004)「協同における出会いと学び」北海道大学大学院教育学研究科社会教育研究室『社会教育研究』第 22 号, pp.1-18
- 櫛ひとみ (2014)「子育ての協同実践における学習の論理」北海道大学大学院教育学研究院社会教育研究室『社会教育研究』第 32 号, pp.7-20